

【話し手の思いを大切に】

4月の朝会で子どもたちに話したのは、「会話が楽しいと感じるのはどんなとき？」でした。

次のような2つの例をあげてみました。

A「昨日勉強が大変で、夜10時までかかっちゃった」 B「それは大変だったね、じゃ今日は少し眠いんじゃないの」 A「そうなんだよ、だから朝なかなか起きられなかったんだ」

これがもしも、A「昨日勉強が大変で、夜10時までかかっちゃった」 B「ぼくは11時まで勉強していたよ」となったら・・・。

A「先週の休みに家族で箱根の温泉に行ってきたんだよ」 B「家族で温泉に行けてよかったね」 A「それでね、箱根で寄木細工のキーホルダーがあったから君にお土産を買ってきたよ」 B「ありがとう、うれしいよ」

これがもしも、A「先週の休みに家族で箱根の温泉に行ってきたんだよ」 B「ぼくはハワイに行ってきたよ」となったら・・・。

どちらがよいかそうでないかは別にして、相手の言うことを「そうだね」「よかったね」「大変だったね」という気持ちを持って聞くことの大切さを子どもたちに伝えたいと考えました。

子ども同士の会話だけでなく、子どもと大人、大人同士の会話においても気をつけなければならないことだと思います。私も会話の後で、「あのとき、どうしてあんなことを言ってしまったのだろう」と後悔することがないようにしたいものです。

【嘘では子どもは納得しない】

先週、ある小学校受験の準備をする教室でお話をさせていただいた際に、最後に何か一言と言われ、とっさに出てきた言葉が「子どもには嘘をつかないでください」でした。教育熱心な親御さんたちに向かってとんでもないことをしてしまったのかもしれませんが、しかし、これは私自身の反省も含めてのことなのです。子どもは大人の嘘を見抜くすごい力を持っているように思います。嘘をつく大人に対して「それは嘘でしょう」と反応するうちはまだ救われますが、「この人は嘘を言うから、信用できない、これ以上何か言っても無駄だ」と思われたらもう取り返しがつきません。仕舞いにはその子ども自身も嘘をつくことを悪いことと思わないようになってしまうかもしれません。

そのとき例に出したのが、冷蔵庫（正しくは冷凍庫）の中にアイスクリームが入っていることを知っている子どもが、母親に向かって「アイスクリーム食べたいな」と言ったときに、母親が「そんなのうちにはありません」と答えたら子どもはどう思うでしょうか。というものでした。あまり重い話題で終わりたくなかったので、そういう例を出してみました。

子どもは嘘をつかれたとき、決して心から納得することはなく、大人に対する不信感と諦めの気持ちを持つことになってしまうことを、私たちは忘れてはいけません。

【学ぶことが多いとは】

登下校も含めた学校生活において子どもたちはたくさんのことを学びます。登下校時には、安全のためにどのような行動を心がけることが大切なのかを、家庭や学校以外の一般社会でも小学生であっても社会のルールやマナーを守ることが求められることを学びます。学校では、学習においても、友だちとの関わりの上でも学ぶことはたくさんあります。学ぶことが多いということは、言い換えると失敗の経験も多いということにもなります。私は失敗の経験を次の自分の生活や行動に活かせる力を一人ひとりの子どもに身につけさせることができなければ、学校、家庭の教育力が疑われても仕方がないと考えます。特に低学年の段階では、同じ失敗を繰り返させないためにも、一人ひとりが失敗経験を次につなげていけるようにしていかなければならないでしょう。そのためには、まわりの子どもや大人の協力が欠かせません。私たちが子どもに接するときは、漠然と子どもを見つめる場合もあれば、いくつかの観点で見つめることもあります。そのようにして見えてくる子どもの姿はまさにその子の「今」を表現しています。それぞれの違う今の姿があり、そこを出発点と考えて目の前の子どもに接していかなければなりません。72名の1年生がいれば、72の出発点があることとなります。保護者の皆さんも、自分の子どもと違う子どもが71名いることを思いながら、それぞれが前に進んでいくことができるよう、温かい目で応援していきましょう。

子どもたちは、毎日たくさんのことを体験して、心にたくさん栄養を蓄え続けます。そういう子どもたちが学校を少しずつ前進させて行きます。主役は子どもたちですが、なくてはならないのが、保護者の皆さんの子どもを支え、応援する力です。この小学校の子どもたちが自分の生活を日々楽しいと実感し、「今日はいいい日だった。明日も楽しみだな。」と思いながら生活できるように、保護者の皆さんと一緒に応援していきたいものです。